

## 新島先生旧邸



相国寺門前の薩摩屋敷跡に最初の学舎第一寮、第二寮および食堂が建ったのは、明治九年九月、位置は現在のクラーク記念館あたりであった。学舎は以後ほぼ毎年一棟ずつ新築され、西方にむかつて建ち並んだ。

新島襄が私邸を建てたのは、明治十一年である。場所は上京区寺町通丸太町上ル松蔭町一四〇番地。同年九月九日に、それまでの仮寓、新島丸頭町四十番地から新居に移っている。その年の五月一日に新築届を上京区の戸長に提出しているから、約四カ月の工事である。

当初の敷地は九〇三坪（英学校を開校した旧高松邸跡）、建築資金は新島のボストンの友人J・M・シアーズの寄付である。木造二階建ての寄棟造りで、内部はだいたい田の字型の間取りである。一階六十五・七三坪、二階四十二・七八坪（他に両親のための家屋二十七・一七坪）。設計者、施工者ともに不明だが、宣教医W・テイラーの助言で床を高くし、また格子の欄間を設けるな

どして通風をよくしたり、陽当たりのよい南面を幅広くしたベランダを三方にめぐらすなどしたという（新島八重談、田中良一筆記）。相国寺門前の学舎にせよ私邸にせよ、テイラーら外国人数員のアドバイザーがいろいろあったのは事実のようだが、私邸に関しては新島および八重夫人の希望やアイデアも、当然ながらはいっているだろう。質素な材料が使われているのも、新島の意思によることだろう。

氏名は詳らかでないが、大工の棟梁は日本人であり、伝統的な和風民家の技法を基礎にしている。建築史家の近藤豊氏は「この建築においては在来和風住宅手法の中に洋風がいかなる形で入っているかに興味がもたれる。第一にいわれるコロニアル様式をとりながら総て真壁造りである」（『明治初期の擬洋風建築の研究』）と書いている。和洋折衷というより、和に洋をとりこんだのである。板張りの洋式トイレなどその典型で、なんとなくほえましい。「民間の大工棟梁たちが、見よう見真似で西欧建築を学習し、民間の建築に応用」（村松貞次郎『日本近代建築の歴史』）する擬洋風の系譜の、京都における源流だといってよい。

造りはそうだが、新島夫妻の住み方が洋風でハイカラであったことについては、ことさら説明の要もあるまい。新島在世中、畳敷きの部屋は二階の間だけであったと伝えられている。明治十四年十一月に、療養していた同志

社教員山崎為徳が亡くなったのは、その畳敷きの部屋であったかもしれない。

この私邸は、同じシアーズの寄付で第二公会の会堂が建築されるまで（明治十四年九月、現洛陽教会の位置）第二公会の集会場となり、その後も日曜学校に開放された。また同志社生徒には書斎の蔵書の利用が許され、大学設立事務所にもこの住居が当てられた。新島はその門戸を、同志社のために広く開いていたのであった。応接間と書斎はほぼ往時のままだといわれている。

明治四十年に、八重夫人は建物と敷地を同志社へ寄付され、同志社は夫人に年金を差し上げることになった。明治四十五年五月には、「大学を休講し新島邸に赴いて遺品を見学する」といった記事が『同志社時報』にみえる。遺邸を訪ねて新島襄をしのぶ教職員、学生生徒は、以後あとを断つことがない。今日では、たんに同志社人だけではなくなっている。

建築後百年を越えた旧邸は老朽化が進み、京都市文化財の指定を受けている関係で、京都市が先年、ほぼ一年をかけて傷み具合を調査した。速やかな改修が必要となっている。

## 旧第二寮



新島襄の校務日録「同志社記事」明治九年七月二十二日の項に、「同志社学校上棟致ス」とある。これが第一寮、第二寮および食堂の三棟で、同年九月十八日に第二寮一階広間で、その献堂式がおこなわれた。大挙上洛した熊本洋学校生徒の歓迎会も、同時におこなわれた。これらの建物の完成とその献堂式は、「真の同志社の開校」(D・W・ラーネット『回想録』)であったと、ラーネットが回顧して語るのも頷ける。同志社はそれまで借家住いであり、生徒数も微々たるものであった。当時、新学年の開始は、九月であった。

三棟の位置は、いまのクラーク記念館のあたりであり、校門は同館東側に相国寺門前通りに面して開かれ、通りを隔てて、同じ年に新島が個人名義で購入した聖書の教場「三十番」教室があった。

ところで、デイヴィスの著『新島襄の生涯』(北垣宗治訳)によると、アメリカン・ボードの宣教師団は、聖書の授業ができないような学校の設立には、

当然ながら、批判的であつたどころか、これを放棄して、より自由な土地へ学校を設けるべきだという意見さえあるような状態だつた。だから、校舎建築の議については「まことに乗り気のしない投票」がなされた。彼らには「建物の建設に政府の承認が得られるかどうか」つよい疑念もあり、京都府庁はおそらく許可しないだろうという思いが働いて投票したのである。その結果は、全員が建築可であつた。

宣教師たちの見込みに反して、京都府が新島の新築届を受理したのは、正課では聖書の授業はしないという誓約書を、新島がいれていたからであつたろう。相国寺門前の桑畑の一隅に、そのようにしてやっと実現に漕ぎつけた洋風の木造校舎が、同志社最初の校舎になつた。宣教医のW・テイラーが建築指導に当つたという。

校舎完成の喜びを伝えたA・ハーディー夫妻宛の手紙のなかで新島は、その二棟には「教室と学生の起居する二十四室」があると書いている。先のラーネットの『回想録』には、「学校には四十七人の寄宿生があつた」とあるから、二階の居室（一階は教室）は、完成と同時に満員になつたはずである。もちろん二人ないし三人相部屋であつた。

同志社最初のこれらの建物は、明治二十五年にクラーク神字館を建築することになつて第二寮は「中学の寄宿舎の後」（『ラーネット『回想録』）つまり

元北寮へ移したが、その後同志社の生徒は激減し、長く無人の状態に置かれていた。

『同志社明治三十六年度報告』に、「女学校寄宿舎狹隘を寛へ元予備校構内（北寮、現・大学会館の位置）第二寮を移築す」とある。これが元の第二寮である。第一回卒業式や新島の自責打掌が行われた記念すべき建物であり、幸い使用に耐えうる状態だったから（西寮へ移した第一寮は、すでに風雨によって傷んでいた）、明治三十六年末に女学校へ移して若干改修し、「新島館」と命名して一階は普通教室と音楽教室に、二階は英文科生の寄宿舎になった。昭和四十七年二月、新島館は女子大学の新館建築のため撤去されることになり、田辺校地へ移築して保存することにした。その後、隣接の地に、昭和五十五年四月同志社国際高等学校が開校し、さらに六十三年四月には国際中学校が併設され、同校の体育館を建設するため、旧第二寮は解体された。解体した木材などは、国際中高のテニス・コートの一角に積み上げられたままになっている。同志社にとってかけがえのない歴史的な建築物なので、一日も早い再建が待たれている。